

サマースタジオ2012

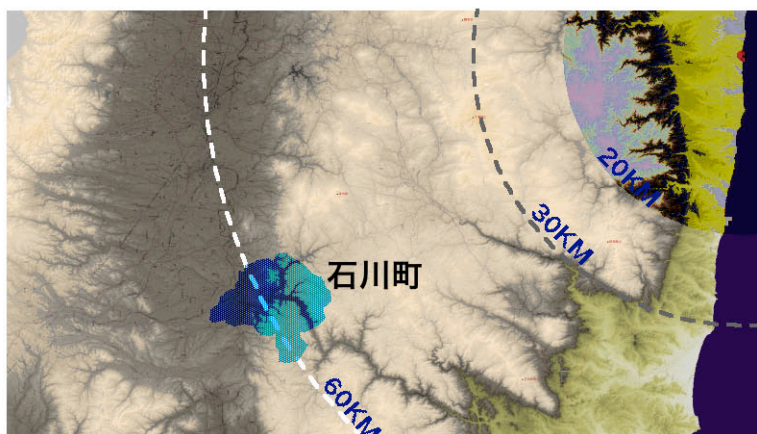
公益社団法人日本造園学会関東支部主催・同東北支部協力・石川町共催

『原発の被害を受けた土地と向き合う』

東日本大震災における原発事故の最大の被害を受けた福島県では、いまだに今後の将来像を描けていない地域が多く、放射線量の程度にかかわらず、風評被害として全県で生活・産業に深刻な影響が続いています。度合いの異なる被害状況の中でも福島県石川郡石川町に注目しました。

石川町は原発事故の警戒区域ならびに計画的避難区域に近接しながらも放射線量の非常に低い自治体、いわゆる「クールスポット」ともいわれる地域の最前線に位置します。そのため、原発事故の被害を受けた土地の復興のための後方支援の拠点となる可能性があります。一方で、原発事故から派生した風評被害の克服が地域に重くのしかかる課題ともなっています。また、原発事故がなくとも高齢化や過疎化が進行する地域でもあり、地域活性化のためのアイデアが求められています。

今年の学生デザインワークショップでは、これら課題の諸相を前提に、現地でのワークショップにおける地元関係者との対話や現地環境の視察を通じて、生活や生業などに関わる具体的な課題や活かすべき環境資産を見だし、解決のためのアイデアや土地・大地との繋がりの中で「再び人々が豊かに暮らすことのできる」地域の将来像について考えてまいりました。



PHASE-1 石川町WS

- 1日目：8/17（金）環境資産の発見
（現地視察・産業の視察）
- 2日目：8/18（土）人文環境のイメージング
（地元関係者・避難地域（楢葉町や広野町などからの住民へのヒアリング）
- 3日目：8/19（日）課題の整理と将来像のプレスト（対話型プレゼン）

PHASE-2 提案のブラッシュアップ

- 9/16（日）中間発表@横浜・新・港区ハンマーヘッドスタジオ
- 10/13（土）造園学会東北支部大会@郡山市
- 10/27（土）～28（日）造園学会関西支部大会@京都造形芸術大学
- 11/24（土）造園学会関東支部大会@筑波大学
- 12月上旬 地元報告会@石川町

目的・ねらい

原発事故によって影響を受けた土地（風評被害等）のひとつとして、周辺地域の後方支援・居住・観光の拠点として、「石川町」のポテンシャルを活かした地域の将来像を描く。

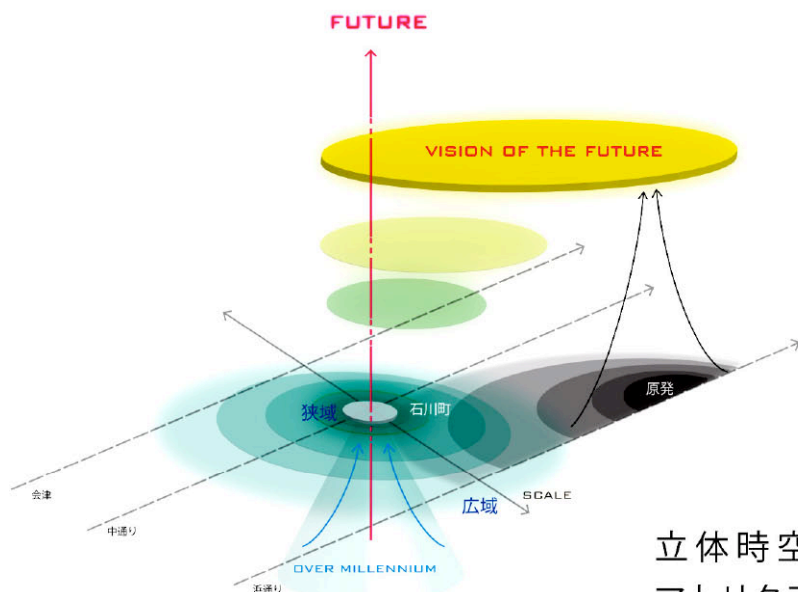
狭域（石川町内）：3つの千年村（石川郷・長田郷・藤田郷（和名類聚抄））を対象地に千年の営みから活かすべき環境資産を発見
ねらい：1000年スケールの長期的将来像を提示し、目先の課題である風評被害を払拭する糸口をさぐる。

広域（福島県）：3つのタテ軸（浜通り・中通り・会津）+原発廃炉
ねらい：石川町を拠点（結び目）とした「ヨコ軸（糸）」を紡ぐことで後方支援・居住・観光に関わる、地域活性化のアイデアを考える。

参加学生 45名・6チーム

東北：
日本大学工学部、宮城大学
関東：
東京農業大学、千葉大学、東京理科大学、武蔵野美術大学、多摩美術大学、
東京都市大学、日本大学生物資源科学部、宇都宮大学、法政大学
関西：
奈良女子大学、大阪芸術大学、京都大学

立体時空 マトリクス

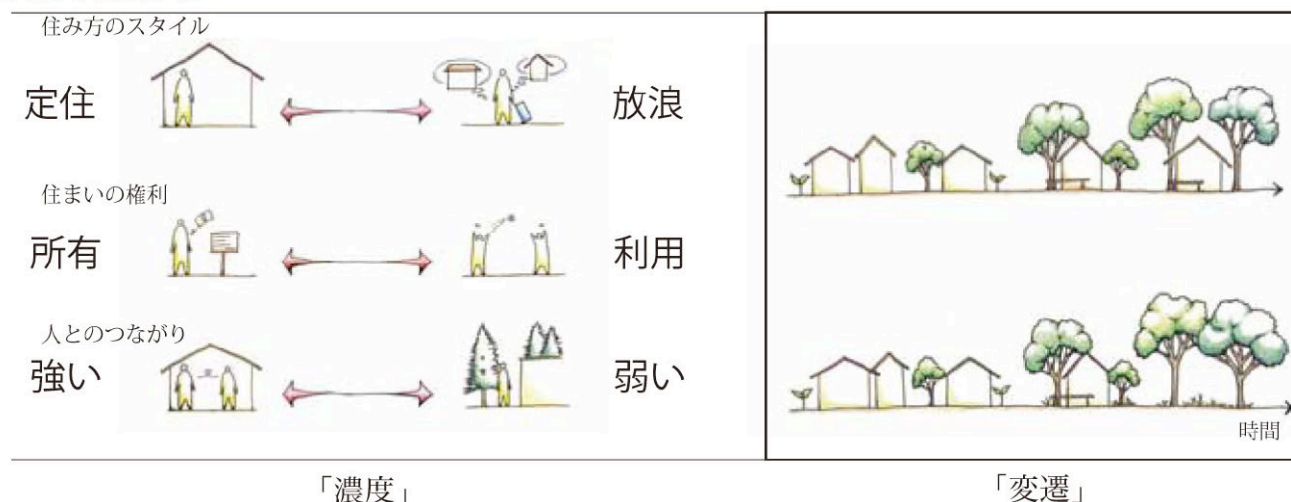


提案タイトル：「新しい住の受け皿としての石川郷～そしてエコロジカルシティへ～」

2012.03.12 の福島第一原子力発電事故により、福島全域は放射能を浴びた危険な土地として (=FUKUSHIMA) 世界中に認知されることとなったが、石川町はクールスポットとしての新たなポテンシャルが生まれた。それをこの町が次ステップへと進むための始まりであると認識した。

そこで、原発から1年半たった今現在でも需要の多い、避難者に対する受け入れに着目する。まず、原発避難者にとって住みやすい、多様な住環境の創出を提案する。そして次にいわゆる仮の住まいと言う住居スタイルに対して変遷という概念で捉えることで、避難民を受け入れることを、この町の発展の基礎にする。

CONCEPT

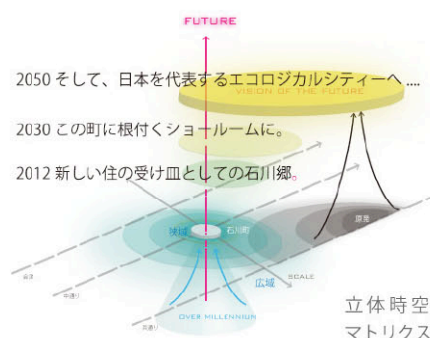


『濃度』 = 避難者のニーズに応える3つの指標

『変遷』 = 仮の住まいにならないための、石川郷のシナリオを想定／提案すること

〈提案の流れ〉

- 1、新しい住の受け皿としての石川郷 (濃度による多様な住環境の提案)
- 2、ショールームとしての石川郷 (変遷による、石川郷の新たな機能の提案)
- 3、エコロジカルシティ (風評被害に対応する、新たな都市モデルの可能性の提案)



石川町の生きる道

■全体コンセプト

福島の基盤産業である農業に着目

原発事故による土壌の放射能汚染が広がっている

放射能の問題を抱えつつ、福島は農業を続けていく必要がある

地域ごとの放射能土壌汚染度をもとに農業マスタープランの作成

⇒マスタープランでは三か所のエリア分けを実施

1、比較的土壌汚染の高いエリア

計画区域農業地帯

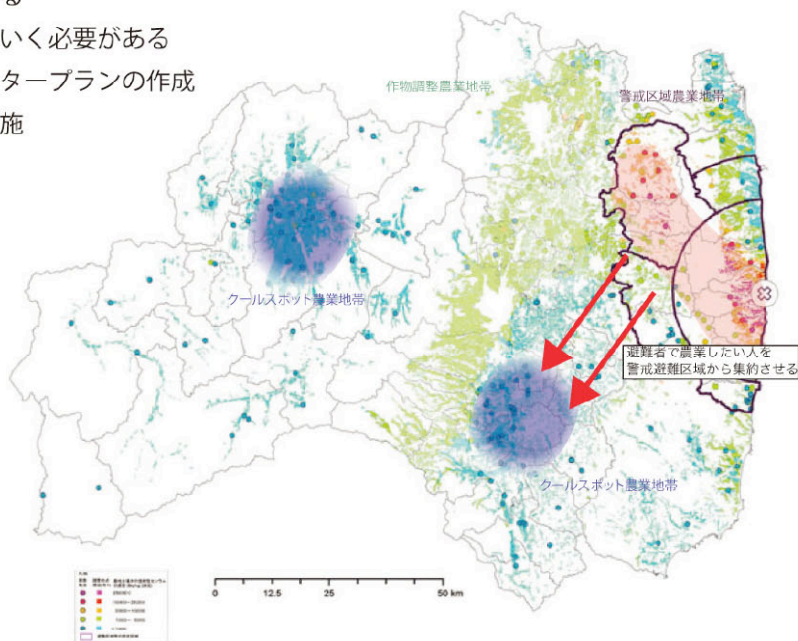
2、土壌汚染が中程度のエリア

作物調整農業地帯

3、土壌汚染が少ないクールスポットエリア

クールスポット農業地帯とする。

福島農業マスタープラン



■クールスポット農業地帯について

クールスポットというポテンシャルを活かして福島農業の一大拠点とする

その中心部として石川町を指定

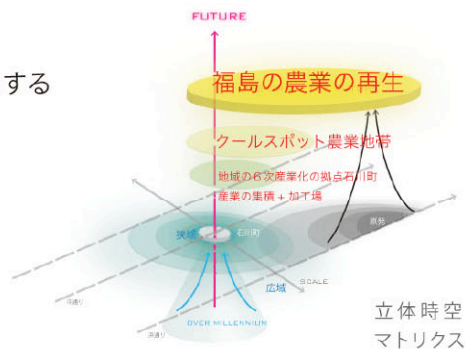
■石川町の機能

1、他のクールスポット農業地帯の生産物を集積する

2、検査する

3、加工販売する

4、石川町の魅力の向上+ブランド化

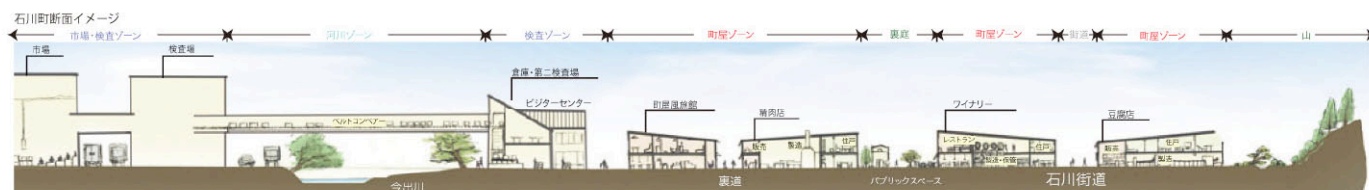


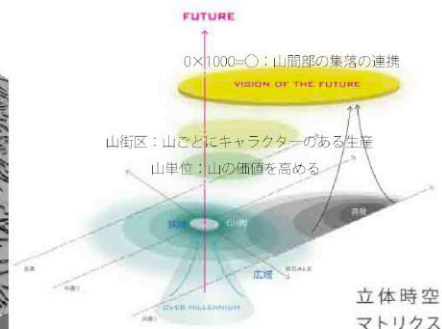
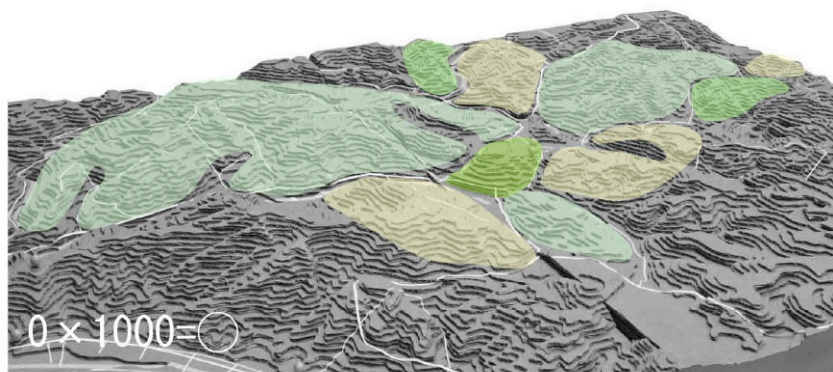
■石川町中心部のデザイン

既存の短冊状の町割りを元に加工・販売・住宅がセットの町家型住宅の配置

⇒6次産業を加速させる原動力に石川町全体を道の駅とする

⇒道の駅という情報発信機能を持たせ6次産業で生み出したものを外部に発信したり、集客機能を付加させていく





<概要>

長田郷の千年村としてのベースには阿武隈高地の残丘地形がある。山は時代を反映するメディアであり、様々な恵みを人に与えてきた。しかしながら時代とともに、山で生産する生活は物流を中心とした谷へと移行され山は荒れた。

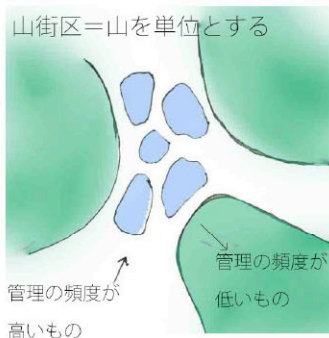
3.11をきっかけに、長田郷のこれからの千年は、原発を経験し、クールフロンティアとしての役割も兼ね備えた山との関わりを考える千年となる。

提案では山単位・山街区という概念によって山を村で共有する事によって土地と知恵を共有し、山の価値を高めていく。

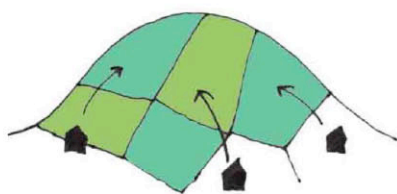
風評被害対応・福島の情報支援としてパルーン型の簡易温室を畑や伐採した場所に設置し安心を可視化するとともに山単位・山街区の移行期間の経済的補助となる。役目を終えたあとは山街区のインフラとして活用される。

風評被害の収まりとともに山は個々のキャラクターを形成し始め長田郷ならではの景観を生む。

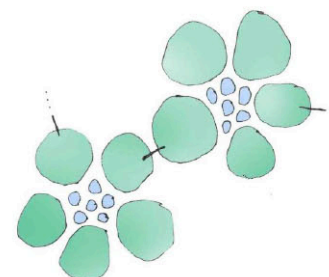
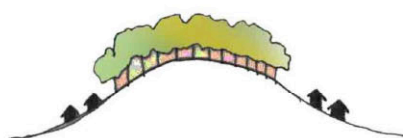
<山の考え方>



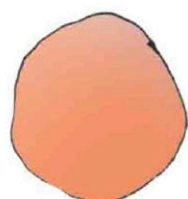
従来：山は個人のもちもの



山単位：共同体で土地と知恵を共有

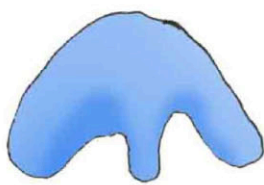


<山のキャラクター>



尾根利用に
特化した山

or



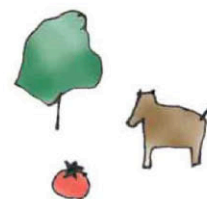
谷利用に
特化した山

+



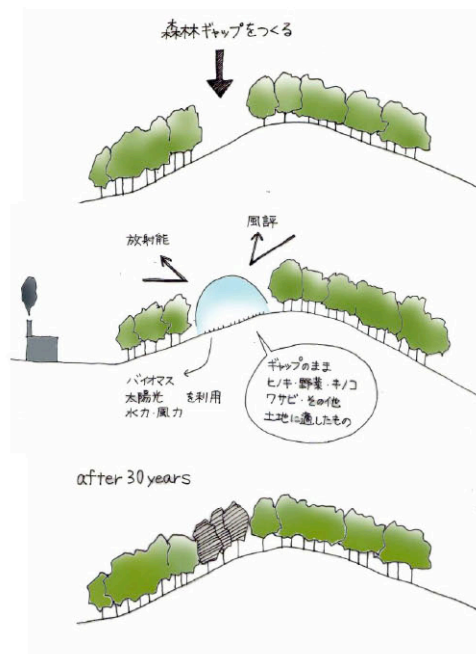
集落の
特色

=



山の用途・植えるもの
のバリエーション

<伐採の段階>



SAKURA × CORRIDOR

- 風評被害を払拭する新たな風景の提案 -

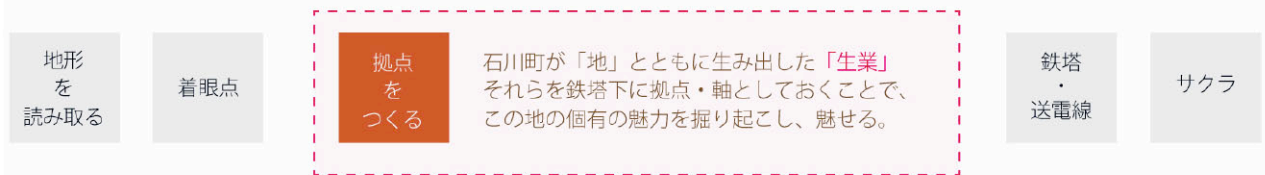
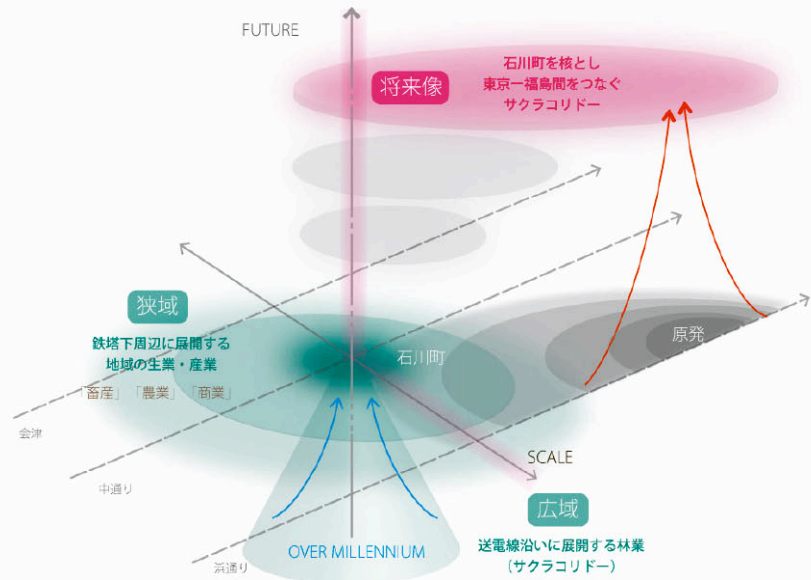
サマースタジオ2012・D班(対象地:長田郷)

「原発の被害を受けた土地と向き合う」

今、福島の地に必要なことは
風評被害という目に見えない意識の壁を
取り払う象徴的な風景である。

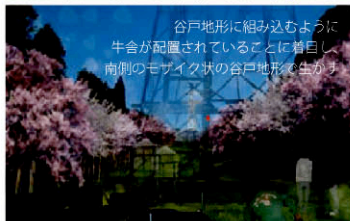
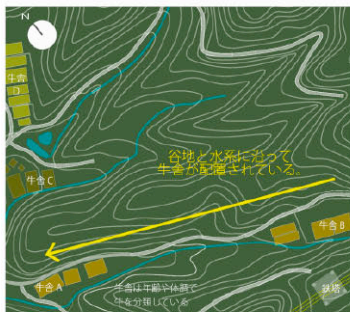
そこで、膨大な電力供給の役割を終えた
東京と福島をつなぐ
＜鉄塔＞と＜送電線＞に着目する。

人々の未来へと進もうとする姿を
福島から東京、そして、
世界へと発信していくための
サクラコリドーを
クールスポットとして
福島の拠点となりうる
石川町を対象として提案する。



畜産 千年の地形から読みとく新しい形の畜産

■ 現在の畜産業の地形を分析し、石川町南側にあるモザイク状の土地で新しい畜産の場を提案する。

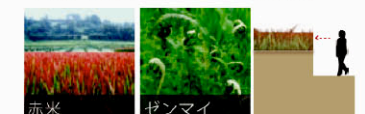


農業 「時(代)」を汲み取った魅せる農

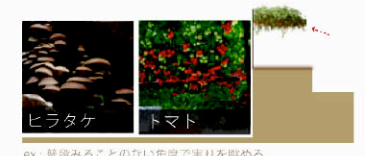
■ 時代を意識してデザインする農
現在トレンドやニーズを汲み取ることで、この地の持続可能な農のありかたを今一度考え、デザインする。



■ 生産プロセスを新たな視点から楽しむことができる農
生産を目的とした農地ではなく、生業としての「プロセス」を楽しむことができる新しい農の場。



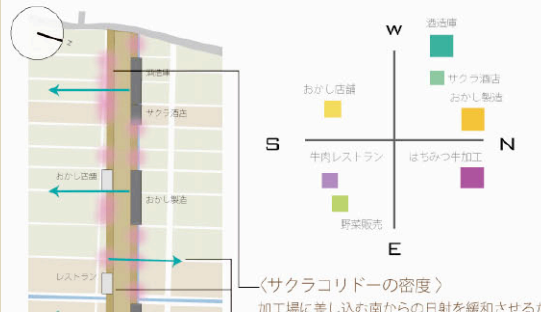
ex: 文が目線の位置に広がる



ex: 普段見ることのない角度で表りを眺める

商業 五感で感じる石川町

■ プログラムと配置計画
御在所街道沿いの谷地に商業の場を設ける。低水分嶺と光を意識した配置計画を行う。



＜サクラコリドーの密度＞
加工場に差し込む南からの日射を緩和させるため、向かいのサクラコリドーは密度を高くするなど光を意識して場所にリズムを与える。

＜異なる河川へ下る景と水分嶺＞
飛鳥川方向と相矢川方向の真逆に下っていく景を見せるために施設を交互にずらして配置。

＜水田モジュール＞
15 × 40の水田の大きさを、この地がつくりあげてきたモジュールとして捉え、施設の形状を決定。



1. わたしたちが震災から感じた、安全安心のために重要な「まち」の備え

- ・安全安心に暮らすためには、「**個人の力**」を備えることと、「**支え合うコミュニティ**」がとても重要だ。
- ・3つの支え合い（自治体どうし、地域どうし、個人どうし）によって、石川町と都市生活者との支え合いの関係をつくる。

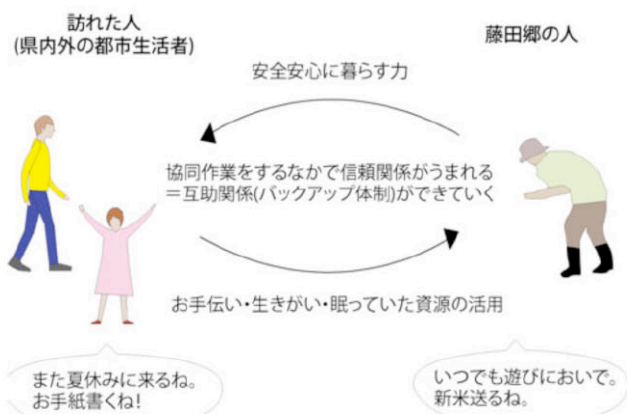
2. 調査からわかった藤田郷の魅力と課題

- ・養蚕、鉱山、農業と産業を変化させながら土地と向き合ってきた、豊かなランドスケープがいまも残っている。
- ・新しい産業のもと、新しい資源やノウハウを生み出し柔軟に生きてきた一方、使われなくなった資産もある。
- ・現在の産業である農業も、採算をとる難しさや、生産調整による補助金がいつまで続くのかという不安を抱えている。

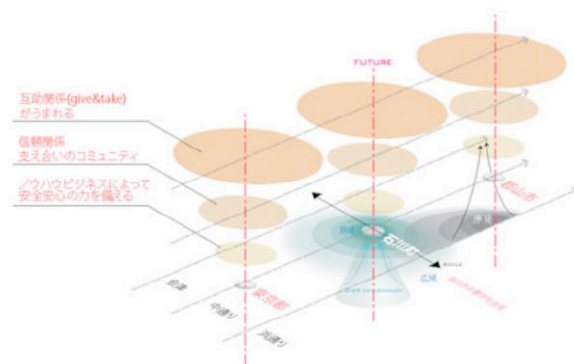
3. 以上をふまえた4つの提案

- (i)訪れた県内外の都市生活者が藤田郷での日々の暮らしの体験を通して、安全安心に暮らす「個人の力」を備える。
- (ii)藤田郷の方は訪れた都市生活者と向き合うことで、今まで蓄積してきたノウハウを活用し、
また放棄地の活用も可能となり、母畑開発事業による負担軽減もはかる。
- (iii)訪れた都市生活者との共同作業を通して信頼関係（コミュニティ）がつけられ、藤田郷が第2のふるさととなり両者に互助関係を育む。
- (iv) 様々な人や地域が支え合う関係が、藤田郷を中心とした持続可能なまちづくりを可能にする。

■訪れた人と藤田郷の人の関係図



■立体的時空マトリクス



「ぐらりと藤田郷」

PHASE1

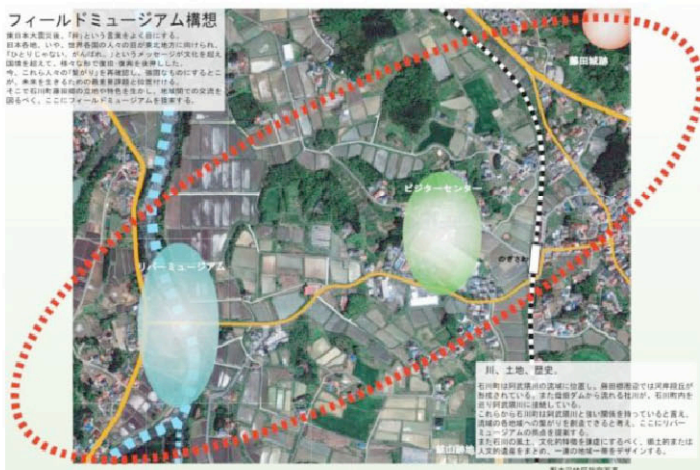
現地調査とヒアリングの結果、藤田郷を3つの要素に分類した。

- (1) 福島県の中通りの骨格軸である武隈川
- (2) 人々に安定した生活環境も与え、希少鉱物の採掘やウラン鉱物の発掘を生み出してきた土
- (3) 自然に抗うことなく、風景に溶け込んで生活している暮らし

PHASE2

集落が持つ自然環境を活かす「藤田郷フィールドミュージアム」を構想する。

まず阿武隈川がリバーミュージアムとして他の自治体と計画し、その拠点の一つとして石川町が積極的にイニシアチブをとる。そして、阿武隈川に直行するよう丘陵地帯に配置されたビジターセンターを中心とし、駅や藤田城など各拠点とのネットワークを築く。ビジターセンターには、鉱山をはじめとする集落の歴史を展示する他、関係する体験プログラムを展開する。また、各拠点へと続く道には藤田郷に見られる谷戸田や河岸段丘などの豊かな景観と、鉱物を利用したオブジェ、ストリートファニチャーを舗装することで散策して楽しいプロムナードを集落の至る所につくりだす。



(上図) 概念図、(下図) 駅からビジターセンターを望む

